英語教材としての映画スクリプト（5）

－歴史的背景とことばの柔軟性から見た名詞の複数形に関して－

Movie Scripts for English Learning/Teaching Material (5)

－On the Plural Forms of the Nouns with their Historical Backgrounds and Flexibility of Language－

飯田泰弘

IIDA Yasuhiro

［キーワード Keyword］　名詞、複数形、規則変化/不規則変化、複合語の主要部、映画英語

［所　　属 Institution］　岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　日本語とは異なり、英語は名詞の形態で「数」を明確に示す言語である。日本語の「私はあそこで犬を見た。」では、目撃した犬の数は単数でも複数でもよいが、英語ではI saw a dog/dogs over there.のように、単数か複数かがはっきりと区別される。この特徴は、日本の英語科教育においても早い段階から学習者に示され、規則変化の綴りは-(e)sだけだが、発音は3種類あることを学ばなければならない（balls、books、boxes）。また、不規則変化をする名詞は、特殊な語尾変化タイプ（e.g., children）や母音変化タイプ（e.g., feet）など、多くのタイプを個別に覚える必要がある。さらに、mothers-in-lawのような複合名詞では、単語の中央付近に-sを生起させる事実も学ぶことになる。本稿では、このような多種多様な英語の複数形を学ぶにあたり、英語学習者の負担を減らし、逆に知的好奇心を増やすためには、①英語の歴史的背景を知り、②ことばの柔軟性を感じることが重要であることを述べる。またそのような学びを助けるうえでは、興味深い実例を数多く観察することができる映画英語が、効果的な教材になることを指摘する。

1.　はじめに

英語は、可算名詞である限りにおいては、名詞における数（number）が形態的に明示される言語である。すなわち、日本語の「私はあそこで犬を見た。」という文の場合、目撃した犬の数は1匹でも複数匹でもかまわないが、英語の場合は1匹の犬であればI saw a dog over there.となり、複数の犬であったならI saw (the) dogs over there.と、常に形態的に区別をしなければならない。すなわち、dogのような規則変化タイプの名詞の場合は、複数を表す屈折語尾の-(e)sを伴うことで、複数であることを明示しなければならない。また、不規則変化の場合も、child - childrenやfoot - feetのように変化の仕方は単語によってさまざまであるが、単数と複数の違いははっきり示される。

このような英語の名詞の数に関する特徴は、日本の英語科教育でも早期から提示される。たとえば、『New Horizon』（東京書籍）では、中学１年生のUnit 3の段階で、可算名詞と不可算名詞の形（form）が次のように使い分けられることが、実例とともに示される。

(1)　数えられる名詞

a.　-(e)sが付くもの　：ball- balls、box - boxes

b.　不規則に変化するもの　：child - children、men -man、tooth - teeth

c.　単数形複数形が同じもの：sheep - sheep、fish - fish　『New Horizon -English Course 1-』(p. 36)

(2)　数えられない名詞

a.　一定の形をもたないもの：water、salt、meat、jam

b.　目に見えないもの　：math、air、information

c.　人や場所、スポーツなど：Sally、Tokyo、tennis　『New Horizon -English Course 1-』(p. 36)

(1)は形態に関する英語のルールを示したものであるが、このルールを知った初級学習者の多くは、そもそもなぜchildはchildrenに、footはfeetになるのか、疑問を持つことだろう。また学習者は、規則変化の発音に関するルールとして、屈折語尾の-(e)sには3パターンの発音があり、ballsとbooksとboxesの場合、それぞれ語尾は[s]と[z]と[iz]で、異なる発音になることを学ばなければならない。さらに英語の学びが進むと、passersbyやmothers-in-lawのような複合名詞の場合は、-(e)sを付加する位置が単語の中央付近になるケースも知ることになる。

そして、このような多くの複雑な規則を習得すると、ようやく、次のような海外ドラマのセリフを正確に読んだり書いたり、発音できるようになるのである。

(3)　Husbands clash with wives, parents cross swords with children. But the bloodiest battles often involve women and their mothers-in-law.　（*Desperate Housewives*, Season 1, Episode 6, 2005）

複数形に関するルールが凝縮された(3)では、規則変化タイプのhusband(s)、parent(s)、sword(s)、battle(s)があり、基体の綴りが変化するwife - wivesもある。このうち、parentsのみが複数語尾が無声音の[s]で、そのほかは有声音の[z]になる。さらに、不規則変化のchild-childrenやwoman-women、そして主要語に屈折語尾を付加する複合名詞のmothers-in-lawまでもが含まれている。[1] すなわち、(3)の文中にある個々の名詞は、それぞれ中学英語で登場する比較的よく目にする単語であるが、この英文の全体像を理解するには、いくつもの複数形のルールを理解しておくことが求められるのである。

本稿においては、このような多種多様な姿を見せる英語の複数形に関して、日本の英語学習者の負担を極力減らし、逆に知的好奇心を増やすためには、学習者が英語の歴史的背景や、ことばの柔軟性を感じることが重要であることを指摘する。さらにそのような学びを助けるうえでは、興味深い実例が豊富に含まれた映画英語を活用することが効果的であることを、具体例とともに示す。[2]

まず2節では、名詞の規則変化の綴りと発音の関係性を確認し、学習者が発音などを間違いやすい変化形に対しては、映画英語の教材としての使用が手助けとなることを示す。3節では、不規則変化に関して、child - childrenとfoot - feetの例を取り上げ、英語の歴史的背景を知ることが、特異に見える変化形の理解を深める一助になることを示す。4節ではさらに、複合名詞の場合は単語の中央付近に-sが生起することを確認したうえで、しかしその生起位置は、英語母語話者の間でも必ずしも一貫していないという指摘を紹介する。この点を踏まえ5節では、英語母語話者が複数形に戸惑うケースは、映画のセリフの中でも描かれることがあり、それは英語のみならず、「ことば」というものの柔軟性や本質を示す、重要な実例であることを述べる。6節は本稿のまとめである。

2.　名詞の規則変化に関して

言わずもがな、映画の英語教材としての強みの一つは、英字新聞や小説などとは異なり、音声情報を確認できることである。よって、名詞の複数形の発音も映画のセリフを聞けば、実際の音声を確認することができる。もちろん、英語字幕を画面に出せば、その綴りも同時に確認可能である。

たとえば、筆者の経験上、month、mouth、mouseという3つの単語の、綴りとその発音を明確に答えられる学習者はあまり多くないように思う。[3] ヒントとして、これらの単語の綴りはそれぞれ、months、mouths、miceになると示しても、それを足掛かりとし、各発音がmʌn(t)s、mauðz、maɪsであると予測できるかも怪しい様子で、とりわけmonthsとmouthsの発音に苦戦している。

非常に身近な英単語であるmouthであっても、たしかに英和辞典の多くでは、複数形のmouthsの発音は「要

---

[1] 『New Horizon』（東京書籍）では、中学1年生向けの教科書（p.164）から、家族構成を示す図の中にsister-in-lawが登場している。

[2] 本稿では、ドラマやアニメも含めて「映画」と呼ぶ。

[3] 『New Horizon』（東京書籍）では、中学1年生向けの教科書から、month、mouth、mouseが登場している。ただし、複数形は示されていない。

注意」であると記されている。よってこの変化形を知るか否かは、学習者個々人が普段から身近な英単語に対しても油断せず、高い学びの意識や好奇心を持ち、どこまで細かな記述にまで気にしているかにかかってくる。可算名詞であるmouthの複数形は、当然、とりたてて奇異な単語でもないため、英語圏における日常生活でも頻繁に目や耳にするものであり、また(4)に示すように、映画のセリフにも多数登場するものである。このようなシーンを、普段からどれだけ注意深く見たり聞いたりしているかが、学びの積み重ねの成果につながってくる。

(4) a. Too many mouths, not enough to go around. (*Avengers: Infinity War*, 2018)
b. Move your mouths. (*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2007)
c. I can't remember what they call each other with their bloody mouths. (*Hannibal Rising*, 2007)

このように、屈折語尾の-(e)sを付加するだけの規則変化でさえ、さまざまな注意が必要である。単数形に-(e)sを付けるという複数形は、現代英語では最も多数で生産的とされるため、規則変化に関する知識は増やしておくことにこしたことはない。

現在では主流となった-(e)sの屈折語尾であるが、歴史的に見れば、古英語では語尾変化は複数あり、多数を占めていたのが-asであった。それが中英語では-esになり広まったことで、現在の-(e)sになったとされる。発音パターンに関しては、現代英語では、下の3つにまとめられる。

(5) a. [-s] ：無声音のあと（books, caps, ...）
b. [-z] ：有声音のあと（kings, birds, bones, ...）
c. [-iz] ：[s]や[z]の音のあと（glasses, roses, ...）

(5a, b)ではいずれも、同化（assimilation）の現象が見られる。つまり、基体の最後の発音が無声音であれば-sの発音も無声音の[s]になり、基体の最後が有声音であれば、-sも同化して有声音の[z]になる。一方で(5c)においては、異化（dissimilation）の現象が見られる。すなわち、glassに-sを付けた glasss は、同じ子音の連続で発音しにくいため、英語では母音の[i]を挿入することで、glasses [glǽsɪz] や、roses [rouzɪz] の発音になる。[4]

しかし、このような音韻論的事実を知っていても、学習者にとって厄介なのは、houseの複数形である。[5] この単語の複数形は、綴りはhousesであるため大きな問題はないが、発音に関しては、単数形の発音が[háʊs]であるため、複数形は(5c)タイプの異化を起こした[háʊsɪz]になると、誤って予測してしまうことが多いのである。しかし、実際の発音はhouses [háʊzɪz]であり、基体の最後の無声音が、複数形の場合は有声音の[z]になったうえで、異化の現象が起こるのである。[6] 当然ながら、houses [háʊzɪz]の発音も、多くの映画のセリフで確認することができる。

(6) a. A ： I started a couple days late last time, and actually I'm waiting for a place to open in one of the houses.
B ： What houses?
A： The... the houses. They have a few houses behind the property for the long stayers.
(*Boy Erased*, 2018)

---

[4] 子音が連続する場合、英語では母音挿入を行うが、言語によっては2つ目の子音を落としたり、１つの長い子音へと併合したりする場合もある。

[5] 『New Horizon』（東京書籍）では、中学1年生向けの教科書（p.79）からhouseが登場しているが、小学校で学んだ単語として紹介されている。

[6] ただし、houseの動詞用法は、そもそも[háʊz]であるため、三人称単数現在形の場合のhousesの発音が[háʊzɪz]になることは不思議ではない。

b.　The Great Houses look to us for leadership, and this threatens the Emperor. By taking Arrakins from the Harkonnens and making it ours, he sets the stage for a war which would weaken both houses.
（*Dune*, 2021）

c.　These are houses? Are you sure this is the way to Elle's house?　（*Legally Blondes*, 2009）

このような、特殊なhouses [háʊzɪz] の発音には、歴史的な英語の変遷が関係している。古英語におけるhouseは、hus（フース）であり、単複同形であったものの、中英語では複数語尾の-es（エス）が広がったため、husもその影響で複数形は語尾に-esを持つようになる。[7] そして当時、母音にはさまれた[s]は、有声音[z]になる習慣が残っていたため、houses は[z]の発音になり、さらに大母音推移の時代に、[u:]が[au]の音になることで、現在のhouses [háʊzɪz]に至ったとされる。[8]

このように、houseのような非常に身近な単語の発音が、(5)で示したどのタイプの英単語とも異なる性質を持つことは、歴史的背景を見れば一定の納得を得ることが可能である。この「納得」というのは英語学習者にとっても非常に重要であり、暗記一辺倒の英語学習に新しい観点を差し込むことができると考える。さらに、そのような英語の歴史をひも解く際には、(6)のような映画英語の実例を提示し、綴りと実際の発音の確認を行うことが、視覚情報と聴覚情報を同時に入れるうえで大事である。

3.　名詞の不規則変化に関して

2節にて、複数形の規則変化を学ぶ際には、英語の歴史的変遷を知ることが、理由なく単語を暗記する学習法からの脱却を促し、ひいては学習者の英語に対する広範な理解につながる可能性を示した。本節ではさらに、不規則変化に関しても歴史的背景を知ることが、同様の効果をもたらす可能性について指摘する。

そもそも英語の単語の中には、英語以外の言語から取り入れられたものも多く、名詞の場合はその複数形に、元の言語の複数形の形態を残すものも少なくない。そのような名詞の場合は、(7)に一例を示すように、英語の規則変化と共存しているケースもある。

(7)	a.	ギリシャ語由来	：	criterion（基準）	外来複数	→	criteria	/	英語複数	→ criterions
	b.	ラテン語由来	：	focus（焦点）	外来複数	→	foci	/	英語複数	→ focuses
	c.	ヘブライ語由来	：	cherub（天使）	外来複数	→	cherubim	/	英語複数	→ cherubs
	d.	イタリア語由来	：	bambino（子供）	外来複数	→	bambini	/	英語複数	→ bambinos
	e.	フランス語由来	：	chateau（城）	外来複数	→	chateaux	/	英語複数	→ chateaus

たしかにこれらの名詞も、広義では英語へと取り込まれたという歴史的背景を持つものではあるが、本節では1節の(1)で示したように、中学英語でも頻出であるchild - childrenとfoot - feetについて、歴史的変遷との観点から重要点を確認する。

3.1　child - childrenに関して

1節の『New Horizon』の例で紹介したように、多くの中学生向け英語教科書において、比較的早い段階にchildの複数形がchildrenになることが示される。[9]この不規則変化に関しても、歴史的に変遷を遂げた結果であることが広く知られている。すなわち、古英語のchildは、長母音のčīldであったが、その後、複数形は語尾

---

[7] この際、husがhousの綴りになりはじめるが、これはノルマン人写字生の習慣によるものとされる。

[8] このように、もともとは単複同形だった名詞が、時代の流れとともに複数語尾-esをとるようになった例には、本稿の冒頭で挙げたwife - wivesや、leaf - leavesがある。これらの単語は、houseとは異なり、複数形の場合は[f]の発音の有声化に加え、綴り字もfからvになったものである。

[9] 『New Horizon』と同様に、『New Crown』（三省堂）では中学1年生向けの教科書のLesson 5（p.88）で、『Sunshine』（開隆堂）では中学1年年生向けの教科書のProgram 6（p.73）で登場するが、『Here We Go！』（光村図書）では中学2年生向けの教科書のUnit 6（p.79）で登場する。

に-ru をとるčīldru になり、次いで短母音のchīldreへと変化する。さらに時は流れ、別の複数語尾の-nが付いたことで、結果的には「child + ru/re + n」という二重複数の形が誕生したのである。

ここでの重要点は、一つ目に、現代英語では「不規則変化」とされるchildrenも、かつては「規則変化」の単語であったことである。そして二つ目は、時代の流れのうちに、複数語尾を2つ持つようになったことである。この事実を学習者に提示することは、英語学習の初期段階で苦戦する「不規則変化」という厄介な名詞のタイプに、新たな視点を持たせることにつながる。また、奇しくも日本語の「子＋ども＋たち」においても、複数を表す語尾が重複していることを示せば、日本語から英語の不規則変化に関する「気づき」を得ることにもつながり、ひいては、「ことば」というより大きなものに対する、知的好奇心を触発する効果も期待できるのである。

childrenの語尾に見られる複数語尾の-enは、現代英語においてもox - oxenや、brother - brethrenにその名残が見られる。とりわけbrethrenの場合は、brotherにはbrothers以外にも複数形があるという、新鮮な驚きを学習者に与えることになるだろう。そしてこれは、単なる驚きに留まらず、単語の変化形は時には2つ存在する場合があるという、重要な言語事実を学習者に示せることにもなる。[10]　意味的特徴を言えば、brethrenには血縁関係の「兄弟」の意味よりも、「同胞、仲間」という意味がでるとされる。この事実は、そのような意味が明らかにでる文脈を持つ映画シーンでの、実際のセリフと紐づけて提示すれば、学習者にとってもより明らかになるだろう。

(8)　a.　What kind of a man betrays his flesh-and-blood brethren for alien metal?

（*Transformers: Age of Extinction*, 2014）

b.　But by the power of the ancient penguin wisdoms we, my brethren, will endure.

（*Happy Feet Two*, 2011）

(8a)は、ロボットと人類の戦いの世界での会話であり、話者は人間のことを「肉も血もある仲間」と表現している。(8b)のアニメの中でペンギンが発するセリフでは、同じペンギンたちを前にした集会でのスピーチの中で、仲間としてbrethrenを使っている。

3.2　foot - feetに関して

child - childrenと同様に、1節の『New Horizon』の例で紹介したfoot - feet の不規則変化に関しても、歴史的な経緯を経て現在の形に至ったことを知れば、摩訶不思議に見える変化形への理解が深まることが見込まれる。

かつてのfootはfōtであり、複数主格や複数対格の場合は語尾に-izを取っていたため、本来の複数形はfōt-izになるはずが、当時ōは「同じ単語の中でiの音が続く場合は、ēになる」という特殊な性質を持ったため、fōt-izではなくfēt-izになった。その後、語尾の-iz が脱落し、fētになる経緯を経たようである。つまりfootの複数形においても、現代英語では「不規則変化」の扱いを受けるが、かつては語尾変化を取るタイプであったことがわかる。このような歴史的背景を知れば、child - childrenのケースと同様に、現代英語を学ぶ英語学習者にとっても、新しい視点を得たと感じられることだろう。さらに、(9)のようなbrethrenとfootが同一文中に登場する映画英語の実例を提示するれば、歴史的変遷を経て現在に至った不規則変化の名詞同士を、互いに関連づけて学べる効果も図れる。

(9)　All I ask our brethren is that they take their feet off our necks.　（*On the Basis of Sex*, 2018）

---

[10] これは、動詞shineが過去形にshoneとshined、動詞hangの過去形にhungとhangedの2つがあること、また名詞のbeautyから派生した形容詞にはbeautifulとbeauteousの2つが存在すること、などと併せて提示するとより深い学びにつながると思われる。

footの複数形がfeetになる経緯で見られた「ō が ē に変わる」といった類の音の変化は、ウムラウト（umlaut）や母音変化（mutation）などと呼ばれ、名詞の単数/複数ペアを含め、多様な品詞にまたがるペアでも現在も残っている。その一例として(10)を示せば、英語の歴史をひも解きながら英語の語彙力強化につなげることもできるだろう。

(10) a.　名詞の単数/複数のペア　：（wo)man - (wo)men や、mouse - mice
　　b.　形容詞と抽象名詞のペア　：long - length や、hot - heat
　　c.　名詞と動詞のペア　：blood - bleed や、food - feed

4.　複合名詞の複数形に関して

ここまで、複数形の規則変化と不規則変化の学びにおいては、英語の歴史的背景も提示することで学習者の学びを深める効果が生まれる可能性を考え、さらに、その学びの際に映画英語を実例提示で用いる有用性ついて論じてきた。本節ではさらに、複合名詞の複数形を通して、英語が変化するのは「過去」の話だけではなく、現在も変わり続けているという「気づき」を学習者に与えることを考えてみたい。

周知の通り、複合名詞の複数形は、原則として主要部を複数形にする。下に示すのが、その一例である。

(11) a.　右の要素が主要部の場合：boyfriend → boyfriends　/　fountain pen → fountain pens
　　b.　左の要素が主要部の場合：passer-by → passers-by　/　mother-in-law → mothers-in-law

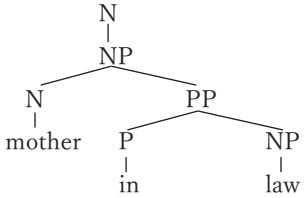
(11a)のタイプは右側の要素が主要部であるため、複合名詞の右端に複数語尾の-sが付加される。一方で(11b)のタイプでは左側の要素が主要部であるため、その要素に-sを付加することになり、結果的に複合名詞の中央付近に-sが現れることになる。これらの事実は、複合名詞の主要部を把握することが、その複合名詞全体の意味や、複数形の形を決めることになる、という重要な点を示している。

しかし、Pinker (1999)をはじめとする文献や、広く英語文法書でも指摘されているように、(11b)のような複合名詞の場合は、-sの生起位置が複合語の中央か右端か、個人により変わることがある。これはすなわち、英語母語話者の場合でも、主要部がどこであるかの認識が変わる可能性を示唆しており、話者がその複合名詞を句（phrase）と認識するか、語（word）と認識するかで、複数形の形に変化がでるということである。[11] 概略、次のように表すことができる。

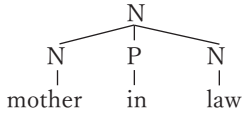
(12)　a.　句（phrase）と判断した場合は、語と語の区切りが見える　→　mothers in law
　　b.　語（word）　と判断した場合は、ひとつの塊として見ている　→　[mother in law]s

Pinkerはこの違いを、下のように図示している。すなわち、(13a)では、階層性があり名詞句と前置詞句の境目が明確で、motherが第1要素であるとの判断ができるが、(13b)は平らな構造となり、mother-in-lawが一つの語のようになっている。そのため、最も右側に-sが現れることになる。

(13)　a.



b.



(Pinker 1999: 28)

[11] 『ロイヤル英文法 改訂新版』では(12a, b)の2タイプに対し、前者が多く見られる形としたうえで、後者を「くだけた表現」や「特に《英》でよく見られるもの」としている。

このような、2つの異なる-sの出現位置からわかるのは、まったく同じ複合語であっても、英語母語話者の認識の違いによって、2種類の複数形が作られるということである。

Pinkerは、類例としてRBIという頭字語を挙げている。野球用語のrunner batted in「打点」の第1要素は、左側の名詞のrunnerであり、複数形はrunners batted inとなる。しかし頭字語のRBIの場合は、その複数形はRBIsになり、RsBIとはならない。すなわち、RBIとなることで本来の句としての構造が見えなくなり、ひと塊となったRBIの場合は、(12b)のケースのように右端に-sが生起する、という考え方である。このような実例は、野球映画の中でも確認できる。

(14) Even though his training methods were a little unusual, Pedro finished in the top five in homers, RBIs, slugging percentage and total boldness.　(*Major League II*, 1994)

では次のような映画英語の中の表現は、どうであろうか。(15)の会話では、in-lawが「親戚、親族」として使われている。

(15)　Al　: Hey, John, how are you doing?
　　John : Holly stood me up a day and I'm here alone in DC with my in-laws.
　　Al　: Eh, the old in-laws, huh? Man, they do love their policemen son-in-laws, don't they?
　　(*Die Hard 2*, 1990)

まず、in-lawに関しては、主要部になる名詞の要素が左端にないため、結果としてin-lawを一語として扱い、右端に複数語尾の-sが付いたと考えられる。一方、policemen son-in-lawsの場合はというと、次のような英語のルールが影響していると考えられる。

(16)　1要素にman, womanを持つ複合語は、両要素を複数形にする。
　　a.　gentlemen-farmers「（働く必要のない）大地主」
　　b　men drivers　「男性運転手」
　　c.　women doctors　「女医」
　　d.　women writers　「女性作家」

このルールにより、まず第1要素のpolicemanは複数形のpolicemenになり、そして第2要素のson-in-lawも複数形になるわけだが、この際に第2要素として(12b)のような「ひと塊」の扱いとなり、その結果、son-in-lawsという右端に-sが生起する形が生まれたのではないだろうか。いずれにしても、(16)のような実例は、主要部ではない要素に-sが付く興味深い実例と言える。そして、このような英語の教科書では見られないような実例が確認できるのも、映画英語の魅力と考えられる。

5.　映画英語の英語教材としての魅力

最後に、mother-in-lawで見たような、英語母語話者の間でも複数形の形に「揺れ」が生じる興味深い例が、映画英語に登場する例を紹介しておこう。まずは、Pinker (1999) などで指摘されている、名詞が不規則変化をしないケースとしては、次のようなものが挙げられることを確認しておく。(17)のような場合は、名詞は規則変化の-(e)sの付加をするのが通常である。

(17)　a.　foreign borrowings（mongooses）
　　b.　name (any more Thomas Manns)
　　c.　quotation (I found three "man"s on page 1.)
　　d.　artificial means (RBIs, PCs, TVs)

この中から、一つ目の例として、(17a)のタイプを見てみたい。英語ではgooseの複数形は不規則変化のgeeseになるが、一方で、語中にgooseを含むmongooseの複数形はmongeeseとはならず、mongoosesという規則変化になる。これは、本来mongooseは外来語であるため(17a)のカテゴリーとなり、英語の不規則変化の適用を受けないためとされる。これを踏まえて、次の会話を見てみよう。

(18) A ： Maybe a new handler will remind us why snakes don't fraternize with mongeese.
B ： Mongeese?
A ： Mongooses?
B ： That's why I always go with scorpions and frogs.　（*White Collar*, Season 5, Episode 2, 2013）

ここでは、話者Ａが最初の発言で、mongooseの複数形として不規則変化形のmongeeseを用いている。しかしその違和感に即座に気づいた話者Bは、異様な面持ちで「Mongeese?」という言葉を繰り返し、異議を唱えている。そして、話者Ａは2回目の発言においてmongoosesにすべきかと問い返す流れができている。考えてみれば、映画のセリフは厳密には自然な会話ではなく、スクリプト・ライターが書いた人工的な会話となるかもしれない。しかしそうであったとしても、(18)のような会話が映画の中に登場することは、英語母語話者であっても複数形に困惑するケースがあることを、スクリプト・ライターが言葉遊びをしながらも、暗示してくれている例と言える。さらに言えば、最後の話者Bの発言における、mongooseの複数形はわかりにくいので、自分はscorpionやfrogを使うという気持ちからも、母語話者の困惑する気持ちが垣間見える。

二つ目として、(17b)のケースを見てみよう。manの複数形は、不規則変化のmenになるのは周知の通りであるが、人名のMannの場合は不規則変化を適用せず、Mannsという-sを付加するのみである。これは、babyのような「子音＋y」で終わる単語の場合は、複数形はbabiesのように、「yをiに変えてから複数語尾を付ける」というルールがある一方で、Kennedyといった人名の場合はKennedysのように、yはそのままにする場合にも見られる。では、次のセリフはどうであろうか。

(19)　So, are Bigfoots, or Bigfeet, violent or aggressive?　（*Castle*, Season 5, Episode 20, 2013）

ここでは、架空の生物であるBigfootという名前の複数形を述べようとした話者が、その複数形に困っていることが分かる。(17)のようなルールに従えば、名前であるBigfootの複数形ではBigfootsという規則変化を適用することが望ましい形となるが、このような特殊な名詞の場合、やはり英語母語話者であっても即座に複数形を決められず、戸惑うという事実が映画の中でも観察できる興味深い実例である。

同じく、footの複数形が関係する、次の例を見てみよう。ここでは、スピーチの壇上に立つBilboは、「～家（のみなさん）」という意味で、姓に複数形の-sを付け、多くの家族に挨拶を述べている。最後に登場する、Proudfoot家との会話が興味深い。

(20)　Bilbo：My dear Bagginses and Boffins, Tooks and Brandybucks, Grubbs, Chubbs, Bolgers, Bracegirdles, and Proudfoots.
Man ： Proudfeet!　（*The Lord of the Rings: The Fellowship of the Ring*, 2001）

Bilboが述べたProudfootsは、(17)で示された「人名は不規則変化しない」というルールからして、規則変化を適用させた正しい形である。しかし、最後の発言のシーンではProudfoot家の男性は、大きな足をテーブルの上に投げ出し、Proudfeet!と大声で言い返し、それを聞いた会場の人々から笑いを得ている。これは、本来は正しい形であるProudfootsを理解したうえで、さらに実際の立派な「足」を見せつけながらProudfeetと述べることで、巧みな言葉遊びをしているものと考えられる。これも、(17)のような英語の名詞におけるルールを裏付けするような、興味深い映画シーンである。

ここまで本節では、英語母語話者であっても、正しい複数形の判断に戸惑うような例を、映画英語の実例を通して考察してきた。これらは、前節で確認したmother-in-lawの複数形が、話者の捉えかた次第でmothers-in-lawにもmother-in-lawsにもなるケースと、非常に似ている。少し見方を変えるなら、それだけ「ことば」というものは柔軟性を持っており、現在もことばは変化の途上にあることを示す証拠とも考えられる。Pinker (1999) は実際に、現在は複数の語が並んだ句と認識され、-sが左側の要素に付いている(21)のような表現が、今後徐々にひと塊の語であると認識にされ始めると、右側の要素に-sが付く日が来るかもしれない、という指摘をしている。

(21)　a.　grant(s)-in-aid　→　[grant-in-aid]s
　　b.　bill(s) of lading　→　[bill of lading]s
　　c.　work(s) of art　→　[work of art]s

このようなことばの柔軟性を英語学習に提示することは、英語のみならず、言語の本質に迫るうえで、非常に重要なことだと言える。

6. まとめ

本稿では、英語学習者が英語の名詞の複数形を学ぶうえは、歴史的背景も併せて知れば、より深い英語の理解を助け、さらには「ことば」というものの本質にまで迫れる可能性があることを示した。またそのような学びをする際には、実際の複数形の綴りや発音が確認でき、さらには教科書などでは見られない興味深い実例も数多く確認できる、映画英語が英語教材として強みを発揮する点に関しても指摘した。

英語の歴史的変遷を見れば、名詞の複数形の形態的、音韻的特徴に加え、「なぜ」不規則変化をするに至ったのか、という理屈を得たうえで英語を学べるようになる。これは、多くの場合が暗記に頼らざるを得ない複数形の不規則変化の学習において、一筋の光明となる可能性を秘めている。下に再掲するセリフのような、複数形に関する情報が凝縮された良質な実例を活用するなど、日本の英語学習者の語彙力強化に寄与できるような指導法の探求は終わらない。

(22)　Husbands clash with wives, parents cross swords with children. But the bloodiest battles often involve women and their mothers-in-law.　(*Desperate Housewives*, Season 1, Episode 6, 2005)

最後に、本稿の議論において重要であった「規則変化/不規則変化」というワードは、英語の動詞の過去形においても言えることである。(5)で示した複数形語尾の-(e)sの3つの発音パターンと同様に、動詞の過去形語尾の-(e)dの発音パターンも、3つである。

(23)　a.　[-t]　：無声音のあと（kicked, stopped, ...）
　　b.　[-d]　：有声音のあと（played, studied, ...）
　　c.　[-id]　：[t]や[d]の音のあと（patted, needed, ...）

理想を言えば、名詞の複数形の効果的な学びの議論には、動詞の過去形の学びも紐付けされていることが望ましい。実際に、映画英語の中には動詞の過去形に関する、興味深い実例も豊富に含まれている。しかしこれらの議題に関しては、また稿を改めて議論したいと思う。

参考文献

朝尾幸次郎（2019）『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』大修館書店.
安藤貞雄.(2005).『現代英文法講義』開拓社.

飯田泰弘（2015）「規則・不規則変化の例示における映画英語の実用性」，映画英語教育学会『映画英語教育研究』第20号, pp. 165-178.

宇賀治正朋（2000）『英語史（現代の英語学シリーズ＜第8巻＞）』開拓社.

原島広至（2018）『語源でわかる中学英語 knowの「k」はなぜ発音しないのか』KADOKAWA.

堀田隆一（2016）『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』研究社.

松浪有（編）（1995）『英語の歴史（テイクオフ英語学シリーズ）』大修館書店.

安井稔・久保田正人（2014）『知っておきたい英語の歴史』開拓社.

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘.（2000）.『ロイヤル英文法改訂新版』旺文社.

Pinker, Steven (1999). *Words and Rules*, Prennial.

教科書

NEW HORIZON English Course 1，東京：東京書籍, 2020.

NEW CROWN English Series 1，東京：三省堂, 2020.

SUNSHINE English Course 1，東京：東京書籍, 2020.

Here We Go! English Course 2，東京：光村図書, 2020.

映画

Bay, M. (Director). (2014). *Transformers: Age of Extinction* [Motion picture]. United States, China & Hong Kong: Paramount Pictures.

Edgerton, J. (Director). (2018). *Boy Erased* [Motion picture]. Australia, United States & China: Focus Features.

Frakes, J. (Director). (2013). The Fast and the Furriest [Television series episode]. *Castle*, Unites States: Beacon Pictures.

Gerber, F. (Director). (2004). Running to Stand Still [Television series episode]. *Desperate Housewives*, United States: Cherry Productions.

Harlin, R. (Director). (1990). *Die Hard 2* [Motion picture]. United States: Twentieth Century Fox.

Holland, S. S. (Director). (2009). *Legally Blondes* [Motion picture]. United States: Metro-Goldwyn-Mayer.

Jackson, P. (Director). (2001). *The Lord of the Rings: The Fellowship of the Ring* [Motion picture]. New Zealand & United States: New Line Cinema.

Kumble, R. (Director). (2013). Out of the Frying Pan [Television series episode]. *White Collar*, United States: Fox Television Studios.

Miller, G., Eck, G. & Peers, D. (Directors). (2011). *Happy Feet Two* [Motion picture]. Australia & United States: Warner Bros..

Russo, A. & Russo, J. (Directors). (2018). *Avengers: Infinity War* [Motion picture]. United States: Marvel Studios.

Villeneuve, D. (Director). (2021) *Dune* [Motion picture]. United States & Canada: Warner Bros..

Ward, D. S. (Director). (1994). *Major League II* [Motion picture]. United States: Morgan Creek Productions.

Webber, P. (Director). (2007). *Hannibal Rising* [Motion picture]. Czech Republic, United Kingdom, France, Italy & United States: Dino De Laurentiis Company.

Yates, D. (Director). (2007). *Harry Potter and the Order of the Phoenix* [Motion picture]. United Kingdom & United States: Warner Bros..